

ハイキング程度の山歩きはしていたが、登山装備をして登り始めたのは記憶を辿ると40歳代後半だったろうか。勤め先の保養所「蓼科山荘」を度々利用し、その周辺の坪庭、縞枯山、白駒池周辺、いわゆる北八ヶ岳に我が子連れ歩いていた。若い頃は持久系の登山など不得意だったが、スポーツジム通いやバドミントンを始めたからか、自然に山歩きも気持ちが良いと感じるようになっていた。その内深い山に入ることになり始めると、前日辺りから日常感じられない緊張感が湧いてくる。先祖返りするのか樹林帯では気持ちが穏やかになり、山中での五感を研ぎ澄ますピリピリ感もたまらない。異口同音に言われる頂上での達成感もある。富士5合目や上高地に下りてくる登山者の表情は妙に明るく（高山病の方以外）、疲労しているのに足取りは軽く見える。自説だがこれは達成感に加え、下山してくると酸素が濃くなり気持ちがハイになるからだと思う。これから重荷を背負って無事帰れるだろうか、不安に駆られている小心者には羨ましい限りだ。

さてそんな頃同い年のT氏に誘われ、大菩薩峠、男体山、八ヶ岳、丹沢山縦走、穂高連峰等を登らせてもらった。次第に経験を積むと登山の魅力を感じると同時に、彼の計画に疑問を感じ始めた。一例だが日帰りの新潟県巻機山（まきはたやま）に誘われた。調べると日帰りでは無理だと思い断った。数日後彼が私を誘った時の計画を変更し、避難小屋泊りの計画で単独登ったそうだが、道に迷いビバークしてしまったと報告があった。

こんな彼の計画のずさんさに気が始める前、『奥多摩三山』の一つ、三頭山に誘われた。はたしてこの山行で彼の計画の甘さが出てしまった。

2004年12月30日始発電車で最寄り駅を出発。冬晴れだ。当時はドラム缶製だった奥多摩湖の浮橋（麦山の浮橋）を渡った。イヨ山→ヌカザス山→三頭山→西原峠→数馬に下る日帰りルートだった。T氏は南北アルプスになど経験豊富、私は全幅の信頼を寄せていた。さて浮橋を渡った迄は予定どおりだったが登山口が見当たらない。二人でウロウロ探し回りやっと朽ちて倒れていた道標を発見。見つからないはずだ。滅多に登山者が使わないルートのような。予定より小1時間遅れだ。急がねばならない。地形図どおりの急登が続く。しばらくすると前日降った雪が2～3センチ、落葉樹の根元や吹き溜まりでは10cm程、高度が増すほど深くなる。予想外だ。仕方がないので急斜面だったので手間取りながら軽アイゼンを初めて装着した。数センチといえども私には初の雪山だ。遅れを挽回するはずが慣れない雪で息も荒くなり、更にコースタイムよりも遅れが増す。積雪で登山道も消えいつの間にか藪道に入り込み道標も枝に巻いてある赤いリボンも見当たらなくなった。彼は平静な表情？でひたすら登り続ける。やや平坦な場所に朽ちかけたテーブルとベンチが突然現れた。このルートで正解だったとひと安心すると、時間が押しているのに彼が珈琲を飲もうよ、とガスコンロで湯を沸かしだした。当然小休止ではない。何故だ！それでも漸く山頂に辿り着くが既に2時間遅れだ。展望も悪く焦っていたので感動はあまりなかった。山頂手前の簡易なルート『都民の森』から登って来たのだろう、数人の登山者に今日初めて出会う。後から思うとそれをエスケープルートにして下山すべきだったのだ。山ではウエアの脱着など普段以上に臨機応変にしなやかな判断が求められる。計画通りのルートで下山しなければならないという思い込みも怖いものだ。

アイゼンを外し、握り飯を食べ早々に出発。明るい尾根道を2時間近く速足で進むと、西原峠で数馬への道標がやっと現れた。もう16時黄昏時、気温が下がり始め夕闇が迫って来た。左に折れ下山し始めると杉、檜の針葉樹林帯になり一気に足元が暗くなる。早々ヘッドライトを装着すると、『ライトが点かない！』T氏の悲愴な声、照明なしでの下山は遭難に繋がる。点検もしてこないとは！と思いながらも持参のペンライトを使ってもらうことにした。最終バスの発車時間が迫っている。明るいライトを持つ私が先頭をとり、急ぐと彼が遅れる。危険なので離れられない。遅れるのは暗いペンライトのためかなとその時は思った。緩傾斜になると樹々の間に黒々と人家が見えてきた。既に18時過ぎ、とつぷりと暮れていた。武蔵五日市行き最終バスはとっくに発車していた。仕方がない、宿探した。見回すと数軒の民宿の電話番号が書いてある看板が目にとまった。今日一の幸運だ。片端から電話したが生憎大晦日前日、全て休業だ。5軒目の民宿との真剣な交渉で『夕食は蕎麦のみ、朝

食無し』の条件で泊めてもらえることになった。それでも有難い。月明かりの下、二人で喜びあった。

宿に着くと汗を吸った下着が急に冷え寒くなってきた。T氏は宿に入ると直ぐ上着を脱いでしまっていたせい
か、突然震えだした。歯もカチカチと鳴り出し話も満足にできない。疲労と寒さで低体温症になったのだ。命に
係わることもある。慌てて宿の風呂に入れてもらおうと、震えは止まり顔色も戻ってきた。宿に到着して良か
った、心底ホッとする。低体温症になると思考力も低下し単純な判断もできなくなるそうだ。私より遅れたのは
疲労からか、プライドが邪魔してバテタとは言えなかったのだろうか。

民宿の炬燵で食べる笹蕎麦が美味い、二人で乾杯した熱燗が五臓六腑にしみ渡る！朝食はザックの底にあった
賞味期限切れの餡餅の非常食と珈琲だった。寝袋は持っていたが我々の装備であの夜ビバークしたらどうなって
いたろうか、山の怖さが蘇ってくる。低山でも遭難が多い。標高に惑わされず十分な装備が重要だ。
信頼しすぎると思考停止に陥るのだろうか、反省の多い山行だった。

翌日の大晦日、昼間からやけに冷えると思っていたが、夜になるとやはり雪になった。
何事も無く過ごせる日常が何と有難いことか。年が暮れていった。